



November 2000 No. 29

(本部事務局) (財) 日本特産農作物種苗協会内 〒107-0052 港区赤坂 2-4-1
 (つくば事務所) 農業情報利用研究会内 JRTつくば事務所
 〒305-0033 茨城県つくば市小野崎 143-3
 TEL 0298-56-8708 FAX 0298-56-0024

目次

朝鮮民主主義人民共和国の「ジャガイモ革命」の現状と対応策	梅村 芳樹	1 頁
第 12 回国際熱帯いも類学会シンポジウムについて	中谷 誠	4 頁
ガリバー旅行記の巨人国はオランダか?	森 元幸	6 頁
いも類の新規用途開発・連携強化シンポジウムと試食会の開催について(ご案内)	緒方 弘志	9 頁
【事務局だより】		11 頁
1)新品種等試験栽培のご案内(13 年向け)		
2)新品種情報(ばれいしょ農林 42 号ユキラシャ)		
3)JRTサーバーの移転について		

朝鮮民主主義人民共和国の「ジャガイモ革命」の現状と対応策

日本いも類研究会会長 梅村 芳樹

はじめに

「ジャガイモ革命」の協力・支援を目的に 7 月 20 日から 27 日まで生産農場、研究所、行政機関を訪問、視察と共に関係者と話し合ってきた。希望した主産地、両江道の生育状況は事情により見られなかったが、見聞きした範囲での実状を取りまとめ、対応策を提案してみたい。

1. 「ジャガイモ革命」の位置づけ

90 年代後半の異常気象による農業生産の停滞、それに伴う食糧不足解決策として金総書記が提案したと言われている「ジャガイモ革命」であるが、平安北道、黄海南道の農業地帯を廻ってみても一つの理由に気付いた。水田は言うまでもなくすべてに作付けされ、灌漑水路や池のほとりの空き地にまで水のあるところすべてにイネが作付けされており、無農薬、無化学肥料に近い栽培にも関わらず、予想以上によい生育であり、病害虫も殆ど発生していないが、畑は大半がトウモロコシの単作(聞けば数十年の連作)である。

他の作物はサイズが少し、傾斜地などの不良地にサツマイモ、桑がある程度で、輪作体系は全く見られないようである。言うまでもなくトウモロコシの連作は地力を消耗する。トウモロコシの生育は畑間差が大きく、傾斜が強くなるほど劣っているようである。対策として密植されているが、肥沃地では明らかに過密植。ジャガイモ、サイズなどを組み合わせた輪作体系の導入が有効であろう。「ジャガイモ革命」

命」が主産地の両江道よりも中部以南の平坦地に力を入れているのは畑の地力維持・向上をめざしているものと推測される。

2. ジャガイモの生産状況

(1) 全般

正確な統計資料は公表されていないが、いろいろな情報を検討すると栽培面積は8万ヘクタール、主産地は北部高原地帯の両江道である。ここは北海道のような古くからの夏作地帯、7月中旬に開花最盛期で生育良好と労働新聞に報じられたと聞いた。今回視察した中部平坦地は春作が3～4月に播種、6月末から7月上旬に収穫、その後は水稲、トウモロコシを植え付け、播種する。

見せて貰ったイモや食べたイモの大きさから推定すると収量はヘクタール当たり10から15ト程度であろう。年降水量が1000mm前後、少肥栽培のため品質は良く、本州産ジャガイモよりは高でんぷんと推定している。収穫時の高温(本年は30近い)の影響はないようである。秋作は7月下旬から8月上旬植え付け、10月中旬の初霜の後収穫する。ただ1カ所見た植え付け後の畑(ごく一部が萌芽)の状況からは収量は春作程度と思われる。

(2) 種子イモ

種子イモは大半が自給、ウィルス汚染が進んでいるのと休眠期間、貯蔵施設のないことがネックになっていて、「ジャガイモ革命」の第一目標は優良種子イモの供給体制確立であることがうなずける。種子イモはジャガイモ生産局では病害対策として無切断を奨励しているとのことであったが、実際の圃場では20g程の少片に切られていた。

(3) 施肥法

施肥は堆肥を畦に入れ、その上に種子イモを置き覆土する。化学肥料の施用については聞き取りしなかった。茎葉の生育は春作の早生品種で30cm程度と聞いた。肥料不足であろう。

(4) 病害虫

病害虫は春作では収穫期前後の軟が病、秋作では疫病が発生するという。ウィルス病の症状については現地担当者はよく判らないようである。(苗挿し法で増殖中の畑で80%程のれん葉症状の株を抜き取り、種子イモの増殖には不可欠な作業と話したら驚いていた)農業科学院で見せて貰った「とうや」20kgのミニコンテナーは大半が粉状そうか病の病斑があった。「ナムソー」と言う現地育成品種は無病斑であり、日本から菌が持ち込まれたのではないかとの指摘を受けた。

(5) 品種

生産農場では品種への関心は低いようである。多収、早期肥大性、短休眠品種の要望は強いが、見せて貰った品種の名前は定かではなく、赤皮のアンディジェナタイプの短休眠品種、黄皮・黄肉の「エゾアカリ」に似た品種であった。ジャガイモ生産局次長朝氏は「エゾアカリ」がごく有望で普及を図っていると話し、もう一つドイツから提供された早生品種(名前を聞き漏らした)も有望という。農業科学院のジャガイモ研究室の品種試験では「とうや」「ワセシロ」が有望、「ナムソー」も同様、「農林一号」「デジマ」は休眠の点では好ましいが肥大が遅いとのことであった。黄海南道の農場では「コナフブキ」「エゾアカリ」2品種の増殖をしており、「コナフブキ」は美味しいとの評価であった。

(6) 利用・貯蔵

大半が食用として収穫後に消費され、貯蔵は種子イモだけのようである。この貯蔵も平壤近郊で土壌凍結が 40cm、平安北道定州里の農場では 60cm 以上あって極めて難しく、40%もの腐敗が冬期間に見られると言う。種子イモ貯蔵庫の支援、貯蔵技術指導を強く求められた。料理は一般には少ないと聞いた。ホテルなどで食べたじゃがいも料理は肉じゃが、天ぷら、ソテー、ポテトサラダ、千切りのフライ、これらもおそらく外国人向けのホテルだからであろう。ポテトチップスは見られなかった。

3. 研究の現状

(1) 農業科学院

時間の関係もあって施設は見せて貰えなかった。外観からは温室群があり、話から日本の通常の研究室並の施設は完備していると思われた。

(2) 組織培養研究所

ウィルスフリー種子イモ生産を目的に各地に作られる予定の第一号を平安北道の農場で視察したが、小さな建物、4つの部屋、中国製のオートクレーブ、クリーンベンチ、スタビライザー、空気清浄機、試験管・フラスコを並べる木製の棚、使い古しの試験管多数、ガラスビンが準備されていた。9月稼働予定で担当者から器具の説明、使い方を問われた。

(3) 水耕栽培農場

これも第1号の施設、黄海南道の農場で視察した。巾3m、長さ20m程のビニールハウス、手製の水槽に発泡スチロールに植えたジャガイモの幼植物が浮かべられていた。溶液の酸素不足で根腐れを起こしており、対応をアドバイスした。土のベッドには苗挿しがしてあり、これも過湿で生育不良、こちらも対応をアドバイスした。

(4) ジャガイモ生産局

最終日の夕食会に次長が培養中の大型試験管2本を持参、植え継ぎが上手く行かないと相談を受けた。生育は極めて良好であったが、明らかな光不足で徒長、補光を十分するよう指示した。

4. 「ジャガイモ革命」の計画概要

印刷物は全く貰えなかったが、聞き取りした範囲での理解は下記のようなものである。

(1) 無病種子イモの増産・供給

金総書記は種子の重要性を第一に指摘しており、組織培養による無病種子イモの生産拠点を建設する。ここから採種圃場へ種子イモを供給、全体に普及させる。

(2) 品種選定と育成

既に始められているが導入品種の試験を農業科学院で3年ほど実施、選抜した品種を現地農場で実証して普及に移す。育種はこれから取り組む。

(3) 栽培技術の研究・普及

立ち後れているが、先進国の協力も得て積極的に進める。

(4) 貯蔵、流通、加工、調理

これらは施設の整備を要するので、外国企業も含めて支援を要請したい。

5. 現地で提案したいいくつかの対応策

(1) 隔離採種圃場の設置とウィルス病再汚染対策

組織培養によるウィルスの除去は比較的容易であるが、その後の再汚染対策が難しく、最重要であることを説得、生産農場へ総花的に配布するのではなく採種専門農場を選定、技術指導と合わせて隔離圃場を作るよう勧めた。日本など先進国の採種システムを紹介した。

(2) MT(マイクロチューバー)による原原種種子イモ生産の検討

施設と技術を要するが、共和国の実状からは最も効率的な採種システムであることを説明。

(3) 育種システム

早期肥大性、短休眠、多収性、病害抵抗性などの育種法を説明、早急に着手するよう勧めた。

(4) それぞれの地域に適した栽培技術の開発・普及

視察した農場の現状からいくつかの技術を指摘した。具体的には種子イモの大きさ、切断方法、キュアリング、大イモ、高でんぷん、低温時早期萌芽個体などウィルス汚染率の低い種子イモの選抜法、初期生育促進のためのソイルマルチなどである。

(5) サツマイモ生産の勧め

視察地域の夏期の高温、少雨、痩せ地と言う条件、サツマイモの生育の良さ(茎葉の)から夏作として適作物と考え、サツマイモの栽培を勧めた。共和国のサツマイモは技術指導が全くされておらず、昔ながらの伝統的栽培、品種も一品種と推定される。また昨年多収で米の替わりに配給されたところ貯蔵、利用ができず、大半が生切り干しに加工、粉にして麺、チジミ、混ぜご飯などに使われたとのこと、利用法の開発・普及も進んでいないようである。

農場で苗の植え方を指導したところ、日本の品種の導入、栽培や調理・加工技術の指導・支援を要請された。サツマイモはジャガイモよりストレスに強く、少肥料で生産でき、わずかな技術を習得すれば中部以南の夏作物として最適と思われる。冬期間の貯蔵に問題はあるが、生、蒸し切り干しなどの伝統的加工、フレーク、ペーストなど近代的加工ができれば潜在需要の開拓が可能であり、食糧不足の解決には最適と考える。

第12回国際熱帯いも類学会シンポジウムについて

第12回国際熱帯いも類学会シンポジウム組織委員会事務局 中谷 誠

平成12年9月10日から16日に、茨城県つくば市の国際会議場にて、第12回国際熱帯いも類学会シンポジウム(Twelfth Symposium of The International Society for Tropical Root Crops)が、国際熱帯いも類学会の主催、国際植物遺伝資源研究所(IPGRI) アジア太平洋食料肥料技術センター(FFTC) 日本いも類研究会、農林水産省農業研究センター並びに国際農林水産業研究センターの共催、農林水産省、茨城県、つくば市、日本作物学会、日本育種学会、園芸学会、日本熱帯農業学会、根研究会の後援により開催されました。

本シンポジウムには、世界50ヶ国より合計205名の参加がありました。この内、約半数が日本からの参加です。海外からは、やはり近隣のアジア諸国からの参加者が多かったですが、アフリカからの参加者も目立ちました。前回の平成9年、トリニダード・トバゴで開催された第11回シンポジウムの参加

者が 100 名余りであったことを考えると、本学会としては、規模の大きなシンポジウムであったと言えます。

表1.地域別参加者数、参加国数等

地域	参加者数	参加国数	参加国等
アフリカ	26	16	アルジェリア、ベニン、カメルーン、エジプト、ガーナ、レソト、マダガスカル、モザンビーク、ナイジェリア、シエラレオネ、南アフリカ、タンザニア、ウガンダ、ジンバブエ
アジア(日本を除く)	41	17	バングラデシュ、中国、インド、インドネシア、イラン、韓国、ラオス、マレーシア、モンゴル、ミャンマー、オマーン、パキスタン、フィリピン、シリア、台湾、タイ、ベトナム
中米	4	4	キューバ、エルサルバドル、ジャマイカ、トリニダードトバゴ
欧州	10	4	オーストリア、フランス、イタリア、英国
北米	5	1	米国
オセアニア	9	4	オーストラリア、パプアニューギニア、パラオ、バヌアツ
南米	5	3	ブラジル、ペルー、ウルグアイ
日本	105	1	協賛団体等よりの招待者を含む
計	205	50	

プログラムの概略は以下のとおりです。

- 10日 受け付け
- 11日 受け付け、開会式、基調講演
- 12日 一般講演(3会場)
- 13日 一般講演(2会場) IPGRI セッション(タロ遺伝資源) ポスター発表、総会、評議委員会
- 14日 IPGRI セッション、FFTC セッション(サツマイモアリモドキゾウムシ)、一般講演(1会場)
- 15日 見学旅行
- 16日 閉会

この中で、158 題の発表が行われました。その概要を表 2 に示します。

表2 作物別・分野別演題数

		口頭発表	ポスター発表	合計
作物別	いも類全般	4		4
	キャッサバ	20	8	28
	サツマイモ	51	14	65
	ジャガイモ	8	1	9
	タロ	21	4	25
	ヤム	14	5	19
	その他	7	1	8
分野別	社会・経済・文化	11	3	14
	遺伝・育種・バイオテク	41	9	49
	生理・生産管理	42	12	54
	病害虫・防除	18	3	21
	ポストハーベスト	13	6	19
合計	125	33	158	

作物別に見ると、今回は日本での開催ということで、サツマイモの演題数が特に多かったこと、世界的にも初めて規模の大きなタロの遺伝資源に関するセッションが設けられたため、タロの演題数が多かったことが特徴として上げられます。

また、分野別に見ると、直近の過去 2、3 回の本学会シンポジウムでは、世界的にいも類の自給的作物から換金作物への役割転換が模索されていたこと等を反映して、品質や加工等ポストハーベスト関係の演題が増え続けていました。今回はポストハーベスト関係の演題数の大幅な増加は見られませんでした。演題数自体はかなりの数に達し、世界的に、いも類の研究の中で、ポストハーベスト関係の研究が重要な一角を占め、それが定着したことを伺わせます。基調講演や一般講演の内容を見ても、品質や加工等を重視し、高品質の製品開発等を通じて、地域経済や農家経営の向上をはかろうとする研究方向は、変わらないと思われました。

一方で、今回最も演題数が多かったのは、栽培管理や土壌管理等のいわゆるアグロノミーに分類される分野で、不良環境でのいも類生産やそれに関連した生理機能についての発表が目につきました。これらは、環境への関心の高まりを反映しているとともに、人口増等により世界的にマージナルな環境へのいも類の導入が進められていることを伺わせます。基本的にいも類は人口余力の高い作物であり、食料安全保障などの面で重要な役割を担わざるを得ないことを感じました。

以上のように、本シンポジウムから、高品質化等による地域経済発展への貢献とフードセキュリティ面の機能向上が、21 世紀初頭のいも類研究の大きな流れとなるのではないかと感じました。

本学会は、発展途上国の研究者が中心で、先進国で開催されるのは今回が初めてでした。事務局の勝手もあり、プログラムはしばしば変更され、講演時間等もあまり厳密ではないために戸惑われた参加者も多かったこととおわび申し上げます。しかし、よく言えばフレキシブルな、悪くいえばいい加減な運営が本学会シンポジウムの伝統で、ある日本の参加者からは、非常に新鮮で面白い運営であったというお言葉を頂戴し、事務局として胸をなで下ろしているところです。海外からの参加者からも評判も良かったと感じました。特に、川越や麻生におじゃましたエクスカージョンは好評でした。

最後になりましたが、本シンポジウムが成功裏に開催できたのも、日本いも類研究会の会員各位のご協力の賜物です。心よりお礼を申し上げます。

ガリバー旅行記の巨人国はオランダか？

北海道農業試験場 ばれいしょ育種研究室長 森 元幸

9月3日から10日の期間で、はじめてオランダへ旅行してきました。オランダの印象を一口で言えば、「なんと無駄のないケチな国」です。普通は、図体が大きいと動作は緩慢になりがちですが、大きな体の馬力にまかせて良く働く人々でした。公費の出張ではなく私費の旅行なので、気の向くまま興味のままに行動できました。その興味のままに、見出しを付けて所感を紹介します。

【無駄のない国】

気象条件は、春が早く秋が遅いなど、十勝より栽培期間を1ヶ月近く延長できるのは魅力である。しかし、圃場条件は、干拓地で土は重たく泥(クレイ)で、地下水位も高く、土壌条件の悪さを技術力でカ

バーして栽培している様子がありありと見えた。牧草地が広がり畜産が盛んであるが、耕作できないところが牧草地となっている。つまり水路の水面が牧草地面からわずか10cmしかないような地下水位が高く耕起不能なところを牧草地としている。さらにアムステルダムからエメロードに向かう高速道路の土手には、風力発電の風車が配置され、その下の土手では羊を放牧して草刈りをさせている。

一見のどかな田園風景の後ろには、精緻な計画があるようだ。これは空港周辺でも見られ、花卉生産の温室が並び、花市場でセリをして空輸で輸出できるように、生産と流通が合理的に配置されている。しかし、明もあれば暗もある。厳しい競争に敗れ去った農場の廃墟は点在し、生産に携わる農民が儲かっているのではなく、流通に携わる商人がより儲かっているのではと感じた。これは単なる憶測であるが、中世からの階級社会の伝統が、資本主義構造の搾取関係に重なって、連綿と続いているような気がした。

【国際ポテト会議 2000 (World Potato Congress : WPC)】

WPC は4年に1回で開かれているバレイショ関連の国際大会で、参加者の延べ人数は千人に達し、世界的視野に立った研究戦略や普及、ビジネスなどに関する情報交換を目的としている。会議の内容は、基礎分野ではなく応用分野を中心とし、種いも生産、病害虫防除、品種改良、食品加工などの各分野についてレビューがなされた。同時に、種いも、青果、加工品、機械類などの輸出貿易に関わる企業や組織の出展が、ヨーロッパや北米を中心に行われていた。また、遺伝子組換え技術(GM)についてワークショップが開かれ、GM技術の節度ある推進はバレイショ産業の発展にとって有用であるが、消費者に受け入れられる合意形成が必要であり、これからも両面にわたって努力するとの論調であった。

この大会は、研究や技術開発よりむしろ現実の企業活動に比重があり、育種家にとっては得るべきものが多かったが、研究者にとっては実りの少ないものであったかもしれない。ヨーロッパからの参加者の弁によれば「我々、育種家はおもしろい情報がたくさん手に入って役に立つが、これは4年に1度のビジネスの祭典だ。研究の情報が得たいのなら、3年ごとに開催される Potato Research の大会に来なさい。」とのことであった。

次回会議は、2003年に中華人民共和国雲南省の昆明・雲南農業大学で開催される予定である。

【カラフルポテトの普及状況】

北海道農業試験場では、アントシアニン色素を含有し肉に着色のある品種、赤肉のインカレッド、紫肉のインカパープルを育成し、さらに改良を続けている。今回のオランダ旅行は、このカラフルポテトの外国における状況調査も目的の一つであった。

WPC 会場内には企業や団体等の展示ブースが多数設けられ、それぞれがビジネスチャンスを得ようと展示に工夫を凝らしていた。この中でカナダの Saskatchewan Seed Potato Growers Association のブースに、紫肉品種が写ったパネルを目にした。ブースの担当者に質問したところ、ロシアン・ブルーもしくはベルビアン・ブルーと呼ばれる品種で、カナダのサスカチュワン州では昔から紫肉品種を食していたとのことである。

エメロードにおける WPC 展示会場では、フランスの企業ブースにカナダとは異なる紫肉品種を発見し

た。VITELLOTTE という品種で、現物を展示し写真入りの種いもカタログを配布していた。ブースの担当者によれば、とても古い品種でやはり昔から栽培しているとのことであった。帰国後、ヨーロッパのバレイショ料理を取り上げた料理雑誌に、この品種で作ったポテトチップの写真を偶然にも目にした。

Scottish Crop Research Institute の担当者の話では、スコットランドには Congo Blue という紫肉の古い品種があったが、今は品種保存のみで一般栽培されていないとのことであった。しかし、日の丸1号(樺太総督府で育成)の様に維管束だけ淡赤に着色した新品種が出回り始めたとのことであった。インカレッドのような赤肉品種の情報は、唯一スコットランドについてのみであった。

アムステルダム・ライ駅近くの青果店において、インカパープルより紫肉の濃いブルーポテトを販売していた。品種名は不明であるがカナダ産とのことであり、形態などからロシアン・ブルーとかなり近い品種であると推測した。4.98DLG/kg(約230-240円/kg)の価格で、一般の品種に比べ3倍程度の価格であった。

【バレイショの価格と加工品】

アムステルダム市内での販売価格は、Lサイズのオランダ国内産が2.49NLG/1.5kg(1NLG=47円で約79円/kg)であり、Accentという品種では2.99NLG/2kg(約71円/kg)であった。Biologische Aardappel(有機農法と思われる)と表記のあるLサイズは、やや高く4.99NLG/2kg(約118円/kg)であった。また、小粒いもが多く売られており、2.99NLG/500g(約282円/kg)と高価であった。いずれも透明な袋での包装形態であり、5kg単位での販売もあり上記より割安になっていた。

一般の店舗ではあまり冷凍食品を見なかったが、フレンチフライタイプが主に販売されていた。またポテトチップスは種類が多く、単純な塩味よりもサワータイプ等の酸味のあるようなものが好まれているようである。

【生花市場見学】

キリンビールのご助力で関連現地法人を通して、あの有名なオランダアムステルダム近郊の生花市場を見学した。広大な敷地の中に4つのオークション会場(鉢物、切り花等)があり、その規模の大きさに驚いた。オークションは、会場で直接参加する形式と、事務所のコンピューターオンライン画面上で行うものがあり、いずれも自分の希望する価格で素早くボタンを押す方式である。日本の市場との違いは、セリ下がり(時計方式) 値の付かないものは廃棄(日本の市場は卸売市場の青果会社が法律に基づき責任を持って売る) 花の日持ちなどの品質検定(日本にはない?)などが見られた。

市場から空港までは地下に専用運搬線路があり、セリから数時間の後には輸出されるように物流が整備され、まさに世界の中心の様相であった。

【最後に】

農業新聞地方版(H12.9.12頃)に「道庁が輸入自由化対応策の情報収集と分析を進めている」とあり本格的な取り組みを期待するものである。ところがせっかく世界の情報が手に入る機会だったのに、日本の行政担当者や農業団体関係者の姿はほとんど見かけず残念であった。これに対しバレイショに関係の深い日本企業はしっかり参加しており、それぞれが企業理論を展開するための情報を持ち帰った

ことと比較すると、お寒いものを感じた。だが、このような会議は、行ってみないとその真実はわからないことが多く、世界会議とか展示会とあっても何の成果も得られないことも往々にしてあるので、これは結果論であるが・・・。

いも類の新規用途開発・連携強化シンポジウムと試食会の開催について(ご案内)

農林水産省農産園芸局畑作振興課農産園芸専門官 緒方 弘志

今般、JA全農を主催として、下記のように甘しょ・馬鈴しょについての新品種、新規用途開発等につきまして、講演・シンポジウム等を開催することとしておりますので、ご案内いたします。

今回も、甘しょ・馬鈴しょの新品種やその製品を展示し、いろいろな料理を試食していただけるよう企画しておりますので是非ともご来場いただければと思います。

講演は、甘しょ・馬鈴しょそれぞれについて、新規用途開発に関わる第一線の方々から新規用途開発を通じた産地振興などを、パネルディスカッションでは、実需者や産地の識者の方々から産地との連携などについてご討論いただくこととしております。

参加料は無料となっておりますが、定員が200名程度の会場ですので、混雑する場合がありますことを予めご了承ください。

記

1 日時 平成12年11月18日(土) 13:00~19:00(試食会を含む。)

2 場所 南青山会館 新館 大会議室

(営団地下鉄銀座線、半蔵門線、千代田線 表参道駅より徒歩5~7分)

東京都港区南青山5丁目7番10号

TEL 03-3406-1365(代)

FAX 03-3400-5663

3 内容

(1) 情勢報告

行政機関からの報告

農林水産省 畑作振興課 いも類班

試験研究機関からの報告

農林水産省 農林水産技術会議 企画調査課

(2) 講演

「有色甘しょの生産と全国販売展開について」(仮題)

沖縄農産谷村(株)ユンタンザ 大城 勝哲 氏

「甘しょの新規用途開発と産地の振興について」(仮題)

(社)宮崎県JA食品開発研究所 杉田 浩一 氏

「「さやか」等新品種の生産と需要開発について」(仮題)

キューピー(株) 佐渡 純一 氏

「新規用途開発と産地での取組」(仮題)

JAめむろフーズ(株) 平光 志伸 氏

(3) パネルディスカッション

コーディネーター: 日本いも類研究会会長 梅村 芳樹 氏
パネラー : (株)照沼商店/茨城県 照沼 勝浩 氏
(有)フェスティバロ社 郷原 茂樹 氏
JA女満別 野村 満之 氏
北海道アグリ・フーズ(株) 田中 晃 氏

(4) 試食会(内容の変更もありますので予め御了承下さい。)

甘しょ 有色甘しょジュース、有色甘しょ入うどん、甘しょ菓子、甘しょ羊かん 等
馬鈴しょ 「さやか」のサラダ、「ベニアカリ」のコロッケ、「キタアカリ」のプレサラダ・
チルドポテト、じゃがバター、「マチルダ」による肉じゃが 等

4 問い合わせ先

全国農業協同組合連合会 農産部いも類でん粉課 担当 福岡氏

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-8-3

(TEL:03-3245-7181 FAX:03-3241-0668)

農林水産省農産園芸局畑作振興課 緒方

〒100-8950 東京都千代田区霞ヶ関1-2-1

(TEL:03-3502-8111(内線4327)、FAX:03-3502-8520)

電子メール: hiroshi_ogata@nm.maff.go.jp

5 申し込み

御所属会社(機関)・住所・電話・FAX番号・出席者氏名・所属を明記し、上記問い合わせ先まで
FAXにて御連絡いただくか、緒方あて電子メールで御連絡下さい。

締め切り:平成12年11月10日(金)

いも類の新規用途開発・連携強化シンポジウムと試食会
申込用紙

全農農産部いも類でん粉課 御中

(FAX:03-3241-0668)

会社名 _____

住所 〒 _____

電話 () _____

FAX () _____

出席者 _____

所属 _____

出席者 _____

所属 _____

事務局だより

(1) 新品種等試験栽培のご案内(13年向け)

平成13年向けの試験栽培については以下の要領で実施しますのでご案内いたします。事務局でも、今後、各種のメディアを通じてPRしますが、会員各位におかれてもお知り合いの方で関心のある方がいらっしゃいましたら、ご紹介いただくようお願いいたします。

ジャガイモ

スタークイーン……………初めてのそうか病抵抗性品種。

普賢丸……………西南暖地向では初のシスト線虫抵抗性品種。

ムサマル……………大粒、多収でフレンチフライ加工適性大。

ジャガキッス レッド 90……………赤皮。マイクロチューバーを利用して増殖された初めての品種。

ジャガキッス パーフル 90 ……紫皮。レッドと同じく肉色は鮮やかな黄色。

イスパランサ・ビオレータ……………美しい紫色の花を鑑賞用として楽しむ品種。(いもにはソラニンが多く含まれ、エグくて食べられません！)

1)数量 各品種1kg(イスパランサ・ビオレータ以外)の詰め合わせ、計5kg 原則として1人あたり10セットまでとします。10セット以上を希望される方はトキタ種苗あてにFAXで在庫を確認してください。

2)配付時期 2月以降暖地から順次発送します。

3)申込方法 13年1月20日までに郵便振替により下記あてに送金してください。

トキタ種苗(株) 馬鈴しょ試験栽培係 あて

〒330-8532 大宮市中川1069

Tel 048-683-3434 Fax 048-688-1167

郵便振替 00130-7-563416

口座名義 トキタ種苗株式会社馬鈴薯試験栽培係

サツマイモ

・サニーレッド……………肉は鮮やかなオレンジ色(高加糖)。甘みが強い。

・春こがね……………沖縄県の青果用品種。いもは長紡錘形で皮は濃赤紫、黄肉。

・ベニオトメ……………栽培しやすい良食味品種。形や大きさが揃いやすい。

・種子島紫……………肉は鮮やかな紫色(アントシアニン色素)。甘みが強く、粉質で美味。沖縄の紅いものに似る。

・コガネセンガン……………白皮で肉は淡黄色で粉質。食味も良い。

1)数量 1品種各5本、計25本。原則として1人あたり10セットまでとします。10セット以上を希望される方は(株)ミヨシあてにFAXで在庫を確認してください。

2)配付時期 5月上旬～下旬に発送します。

3)申込方法 13年3月20日までに郵便振替により下記あてに送金してください。

(株)ミヨシ さつまいも試験栽培係 あて

〒408-0041 山梨県北巨摩郡小淵沢町上笹尾 3181

Tel:0551-36-5913 Fax:0551-36-5901

郵便振替：00100-8-178816

口座名義：株式会社 ミヨシさつまいも試験栽培係

注：1)募集は500セット(先着順)を予定しています。

2)費用は、ジャガイモ、サツマイモ、それぞれ1セット 2,500円です。振り込み手数料(70円程度)は申込者の負担とします。(本年度から、会員、非会員ともに一律の参加費とし、会員には早く通知することとさせていただきました。)

3)振込み用紙に電話及びFAX番号、ジャガイモかサツマイモかを明記してください。

4)試験栽培の経緯等の詳細や、参加者からのレポート等を研究会のホームページに掲載しています。

(2) 新品種情報(ばれいしょ農林42号ユキラシャ)

平成12年10月24日に農林水産省から平成12年度(第2回)命名登録品種一覧が公表されています。その中に「ばれいしょ農林42号ユキラシャ(北海83号)」が含まれていますので紹介します。

- ・ 中早生に属する生食用品種で強度のジャガイモそうか病抵抗性を有する。
- ・ 白肉で剥皮・調理後の変色が少なく、いもの休眠期間が長く、貯蔵性が良い。
- ・ 業務向けのサラダ、コロッケなどの加工用にも適する〔北海道農業試験場〕

品種特性や画像データはJRTWebの(<http://www.jrt.gr.jp/var/n42.html>)をご覧ください。

(3) JRT サーバーの移転について

日本いも類研究会では、これまで農業情報利用研究会(JSAI)のサーバーを利用してホームページ(JRTWeb)や2つのメーリングリストを運用してきましたが、会員へのサービス向上や事務局作業の効率化を図るため、10月から独自のサーバーに移転しました。新たなURL等は以下のとおりです。今後とも、日本いも類研究会の活動にご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

ホームページのURL <http://www.jrt.gr.jp/>

メーリングリスト(ML)じゃがいも potato@jrt.gr.jp

さつまいも sweetpotato@jrt.gr.jp

メーリングリストの技術的な問合せ先 jrtadmin@jrt.gr.jp